



TITLE:

岡先生を偲ぶ

AUTHOR(S):

山沢, 孝至

CITATION:

山沢, 孝至. 岡先生を偲ぶ. 西洋古典論集 2001, 別冊: 145-147

ISSUE DATE:

2001-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/68693>

RIGHT:

岡先生を偲ぶ

山沢孝至

岡先生に初めてお目にかかったのは、西ドイツから戻られてその帰国の報告のため、松平研究室に顔を出された時だったと思う。ちょうどアルプスの少女を描いたテレビアニメが日本から逆輸出されて大評判になっていた頃のこととて、「『ハイディ』、『ハイディ』で大騒ぎをしていました」というようなことを言われた。くぐもったh音で始まるその「ハイディ」の発音で、いかにもドイツ語に堪能な先生だと了解できた。岡先生の「ハイディ」は、20年以上経った今でも、不思議と耳の奥に残っている。

だからという訳ではないが、岡先生にはどこか女性的なところがあるという印象が生まれ、これはついに消えることがなかった。滑らかな声で、やや甲高く、穏やかに話されるところから来る印象だったかもしれない。演習の授業でも、学生の訳読に問題がないときには、押し殺し気味の、やはり少々甲高い声で「ええ」と相槌を打たれるのが常であって、そういうときには、テキストを持った右手を中空に差し出して上向き加減になっておられるか、またはテーブルの上に拡げたテキストを睨め回すように真上から俯瞰しておられるのだった。それは、一見授業を楽しんでおられるようにも見えた。

しかし、不遜な言い方になるが、先生にとって大学の授業は、後進を育て、自らの知識を伝えねばならないとの義務感・責任感に出たものであって、どちらかというと先生の「人」には合っていなかったのではないかという気がする。ギリシア語であれラテン語であれ易々と読みこなされる先生には、我々学生のたどたどしい訳は聞き疲れのするものだったろうし、声帯があまり丈夫ではなかったのか、少し無理をして話し続けられると調子が悪くなるらしかった。大学に出てきた日は家に帰っても勉強が出来ないと仰有っていたが、何事にもよく気の付かれる先生には、授業の疲れの外に、対人面などで人一倍神経を働かせてしまわれることからくる疲労もあったのではないかと思う。しかも、大学での先生は、授業以外にも、片時も休むことなく頭をフル回転させておられる御様子だった。（一度、大学入試の朝、監督者一同に対して、問題に訂正があるので、問題と解答用紙を配り終えたら次に訂正文を印刷した紙片を

裏向きに配布するように、との指示があったとき、「裏向けただけだと透けて見えますが、構わないですか」と、間髪を容れず的を得た質問をされたのに驚いたことがある。)

だから、大多数の大学教師がそうであるように、岡先生も恐らくは御自宅で御自分の研究に打ち込んでおられるときが最も心愉しく心安らかな時だったのではないか。学者としての至福の時間を過ごされたのは御自宅であったと思う。先生の日課がどのようなものであったか、詳しくは聞きそびれてしまったが、或る年、炎暑の続いた夏が明けて大学で久しぶりに先生とお会いしての帰り、「いやあ、1日10時間勉強しようと思っても出来ないもんだね。君、どうですか。出来ますか」と真顔で問われたのには参ってしまった。まさか、今年は暑さに負けてほとんど何も出来ませんでしたと本当のことを答える訳にもいかず、ただ小さくなっているより外なかった。

岡先生の学問については、然るべき人が話題にされるだろうが、「テキストをして語らしめる」、すなわち、テキストを精密に読み、作品の構造を分析することから自ずと答えが導かれるという、地味だが、実に真っ当なアプローチを基本にしておられた。ホメーロス研究の大冊、ギリシア悲劇とラテン文学に関する論集等を刊行されているが、こういう本格的な研究書とは別に、例えば「ホメーロス研究入門」、或いは「ギリシア・ラテン文学研究の心得」といった初学者向けの手引きを著わして下さっていたらどんなによかっただろう。今となっては叶わぬことであるが。

勿論、先生には翻訳の御業績も多い。しかし、こと翻訳となると慮外のトラブルが出来して、御苦勞をされることも少なくなかったようだ。かく言う自分も、先生から一向に催促がないのをいいことに、怠け心で大事なお仕事を滞らせてしまったことがあり、慙愧に堪えない。性怠惰なことについては、これ以外にも随分と御心配をおかけした筈である。全く、お詫びの仕様もない。

最初の入院をされる前、岡先生はわざわざ電話をしてこられて、病巣の発見までの経過、告知を求めたこと、手術を受けること、見舞いは一切不要であることなどを淡々と話され、「これはモイラだね」と仰有った。2度ばかり仰有ったような気がする。いつもと変わらぬ穏やかな口調だった。が、心の葛藤を漸く鎮められた上でのお電話だったのかもしれないと、今になって思う。このときは、発見が早いことでもあり、最新の治療を受けられれば大丈夫と思った

ので、そう申し上げたが、どの程度励ましになったか。しかし、秋口には「最近ではワインも飲んでるよ」というほどに恢復されたのだったから、病魔を克服されたものと安心していた。

亡くなられる前の年の12月初めにも、久しぶりに岡先生から電話を頂いたが、生憎留守をしていた上、傲慢にも折り返しお電話するほどの用件ではないと勝手に決め込んで、そのままにしてしまった。それから程なく3度目の、そして最後の、入院をされたのであったことは、御葬儀の際に知った。

『オイディプス王』の御翻訳を契機に、先生は、斯界周知の「オイディプス論争」の一方の論客として斬新な説を展開されたが、その過程で著わされた御論文の中で、オイディプスの陥った苦境へのアナロジーとして、そもそも論文の中に私事を持ち込まれぬ先生としては全く異例なことに、御自分の病に触れられ、手術で治るものなら治りたい、家族のためにもそうしたいと思ったと書かれていた。これを読んだとき、この論争へのただならぬ気迫を感じるとともに、御家族を案じられる先生の真情に心を打たれた。——かくも御家族にとって優しく、また我々にとっても優しい導き手であった岡先生は、もはやこの世におられない。あたかも澄みわたる湖面のように清明であった先生の笑顔を心に想い浮かべる都度、師恩に感謝し、御冥福をお祈りするよりない。